

文化財の人災（放火・盗難など）に関する現地調査報告

金 玫淑*・谷口 仁士**

I. はじめに

近年における文化財建造物の放火や美術工芸品の盗難被害の増加に伴い、文化庁では「国宝・重要文化財（美術工芸品）の防災、防火及び防犯対策の徹底等について」（平成25年8月19日 25財美学第120号）の通知¹⁾を出すとともに各自治体の教育委員会に防火防犯対策を促している。しかし、2012年度に立命館大学歴史都市防災研究センターが文化財所有者を対象に実施したアンケート調査の結果によると²⁾、防犯体制としては巡回などの自主的な活動と警報設備が主な対策となっており、防犯設備の導入は全回答者の56.2%に留まっていることが判明した。

そこで、著者らは各被害事例の分析結果を基に今後の文化財防御システムの開発に資することを目的とし、2013年度から放火や盗難などの人災による被害に遭った文化財の所有者を訪れ、ヒアリング調査を行った。また、被害現場などの現地調査を通じて、文化財が直面している現状の課題の調査を行った。本稿は、2013年4月から12月にかけて調査した内容の略報である。

但し、本稿で公開する情報（特に、盗難）が他の被害を呼ぶ恐れもあるため、本稿では寺社名や防犯システムの全容がわかる資料は省くので、ご理解頂きたい。

II. 調査の概要

本調査の調査対象は、2012年度のアンケート調査にご協力頂いた寺社のうち、盗難被害に遭ったことがあると回答した箇所を中心としつつ、2012年に出版された菅野朋子の『韓国窃盗ビジネスを追い — 狙われる日本の「国宝」』³⁾の事例の中でセキュリティシステムがあったにも関わらず盗難被害に遭った箇所、最近の盗難

事例などを含めて順次調査を行った。

III. 調査の内容

1. R寺（愛知県豊田市所在）

2001年9月22日、午前9時30分頃に住職の奥さんが防犯用の警報器の音で収蔵庫の異常に気づき、住職や他の人に知らせたが、被害当時



写真1 収蔵庫の内側上部に設置された侵入警報器

にも警報器（写真1）が付いており、どこを開けても同様の警報音が鳴る仕組みであったため、被害当日は収蔵庫までには確認に行かなかったそうである。被害現場である収蔵庫は写真2のように鉄扉の合わせ目や目じり隠しが外され、2ヶ所の錠は壊され、内扉（木製）の錠前も外され、壁に掛かっていた掛け軸がなくなり、内部が荒らされていたという。



写真2 収蔵庫の扉における被害痕跡
（左：表の鉄扉、右：木製の内扉）

* 立命館大学歴史都市防災研究所・専門研究員

** 立命館大学歴史都市防災研究所・教授



写真3 盗まれた「絹本着色観経曼荼羅」のレプリカ

被害内容としては、県指定文化財の「観経曼荼羅図」1幅⁴⁾(写真3)をはじめ、「山越阿弥陀図」1幅(市指定文化財)、「阿弥陀二十五菩薩来迎図」1幅(市指定文化財)、「千体地藏尊図」1幅(市指定文化財)、「釈迦涅槃図」1幅の計5点が盗まれたことを当時確認した。しかし、2003年5月に兵庫県警察より犯人(韓国人窃盗グループ)がR寺より7、8点盗んだと供述しているという連絡を受けたため、

改めて調査した結果、計7点の被害があることに気づいたようである。犯人が全員逮捕されたため、R寺にて現場検証を行った結果、犯罪にはバールを使用したことが判明し、近所の畑で犯行に使われたバールも見つかったようである。

被害後には本堂や他の建物の警報器と収蔵庫の警報器を分離し、窃盗には十分な配慮をしている。

2. K寺(兵庫県加古川市所在)

K寺は幾度となく窃盗被害に遭遇し、その度に収蔵庫の新築と防御システムの強化を行って来た(写真4)。

代表的な事例としては、まず1935年と1963年の金銅聖観音立像(重要文化財)の盗難を挙げることができる。両方の事件とも仏像はお寺に返還されることにはなかったが、後者の事件で天衣の一部が切断されるなどの損害があり、後に原状通りに修復されている。この仏像は、2002年の盗難被害に遭っておらず、当時の被害現場の写真(写真5)で確認すると展示室の床に転がっている⁵⁾。被害から免れた理由として、観音像は重くて持ち運びを断念したと推定している。

次いで、1991年に観音堂(木造)にて十一面観音像(秘仏)、善光寺如来像などの仏像5体が盗まれた。住職の話によると、観音像は秘仏であったため、K寺にも写真はなかったが、台座ごと持っていかれたので台座の型が一致したことと、台座の付近の埃の成分も一致したので、K寺のものに間違いはないということでお寺に取

り戻すことができたそうである。この事件は、日本人の窃盗団によるもので、大阪の平野区にある骨董品屋で見つかったという。

近年の盗難被害としては、2002年7月の大雨の嵐の夜に発生した盗難事件(写真5)で、宝物館にて掛け軸8幅が韓国人窃盗団によって盗まれた。被害の内訳は、「聖徳太子絵伝」6幅⁶⁾と「釈

迦三尊十六善神像」(市指定文化財)1幅、高麗仏画の「阿弥陀三尊像」1幅である。特に、「阿弥陀三尊像」はまだ戻されていない。当時、収蔵庫には玄関の入口とは別途に展示室の入口にもシャッターと警報装置が付いていたが、犯人はその入口を利用せず、警報装置が付いてい

ない事務室から展示室に繋がっていた窓を犯行口として利用したことが判明している。この事件に関しては、境内の係の女性が、事件発生の1~2週間前に「一切喋らず、目付きの悪い人が何回か来た(おそらく下見)」と証言しているという。

K寺では、盗難以外に放火にも遭っている。1976年8月、県指定文化財の木造の三重塔の鍵穴から油を染み込ませ新聞紙を導火線代わりに突っ込んで放火したという。住職の証言によると、塔内から燃えてしまったので消火に苦労したようで、一度鎮火したと思い消防車が帰った後に再び燃え上がったという。幸いにも心柱は残り、仏



写真4 K寺における収蔵庫の変遷(上:初代の収蔵庫(大正時代、木造)、中:2代目の宝物館(1966年、鉄筋コンクリート造)、下:新宝物館(2012年、鉄筋コンクリート造)



写真5 K寺における2002年の盗難被害の現場(菅野、2012)

像も搬出できたので、1980年に復原し⁷⁾、現在では塔の周りにはフェンスを巡らせ、厳重な警戒をしている（写真6）。放火犯は捕まったが、心身耗弱の人で、K寺近くの神社の鰐口の紐も放火したという。



写真6 復原されたK寺三重塔

また、5~6年前には、開門前に新薬師堂に侵入され、お堂の中の全ての蠟燭に火がつけられたり、仁王門の近くのプラスチックのベンチが放火される事件があったそうである。

現在は、昨年度に竣工した新宝物館が3代目の収蔵庫（写真4）としての役割を果たしているとともに、宝物館だけでなく、伽藍境内にも近年に防火・防犯設備の整備をしたという。

3. 対馬の盗難被害

2012年10月に対馬の文化財が韓国人窃盗団によって盗まれ、その一部が韓国に渡っていることが判明し、返還を巡った日韓の議論が続いている事例である。被害内容は小綱・K寺では観世音菩薩坐像（県指定文化財、写真7）が、木坂・K神社では銅如来立像（重要文化財、写真8）が、豆酏・T神社では大蔵経（県指定文化財）である。

捕まった犯人らは大蔵経を犯行現場近くの山に破棄



写真7 観世音菩薩坐像⁸⁾

写真8 銅如来立像⁸⁾

したと供述したそうであるが、対馬警察と対馬市教育委員会が捜査を行ったが未だに見つかっていないという。

観世音菩薩坐像が取られたK寺には住職は常住しておらず、高齢者の檀家が管理人として日常の管理を行っていた。管理人には事件当初は被害に気づいておらず、後に警察からのお話で盗難被害に遭っていることに気づいたそうである。

対馬の被害場所3か所とも、近所の住民による参拝が多いため、今まではセキュリティシステムの強化などは特にしていない所であった。また、3か所とも施錠は簡単なもので、無住寺社であることが早期発見を遅らせたと推定できる。

4. I寺（滋賀県大津市所在）

1948年7月19日の夕刻、I寺の本堂に安置されていた聖観音菩薩像が本堂の片隅に潜んでいた2人組の若い男達によって持ち去られたが、約10日後には仏頭が無くなった胴体のみが寺に戻ったという⁹⁾。仏頭はまだ見つかっておらず、石翔倶楽部による聖観音菩薩像の仏頭を取り戻すための活動が続いているようである（図1）。



図1 石翔倶楽部による聖観音菩薩像の仏頭を取り戻すための活動チラシ（石山寺よりご提供）

5. G寺（奈良県奈良市所在）

G寺では最近には盗難被害はなく、5~6年前に防災・防犯設備も更新したようである。古い事例ではあるが、30年ぐらい前には収蔵庫にあった小塔の各層の四隅に付けられてあった風鐸が修学旅行生らによって取られるが多かったそうで、現在は小塔に近寄ることができないように展示物の下に段を設け、四隅にはセンサーを付けて、収蔵庫の内部にはカメラを設けていた

(写真9)。

また、仏堂では普段使う仏具(特に、五鈷杵のうち小さいもの)が無くなる傾向があるようで、その対策としては柵を設置するなり、あるいは使う時だけに取り出しているそうである。

その他に、拝観客が少ない時に、石造

仏のうち小さいものが無くなる傾向があった。その手口は拝観時間よりも早くにお寺に入ってリュックサックの中に入れて持ち帰ったという。

6. K寺(奈良県奈良市所在)

K寺では1995年3月15日9時～10時に本堂に安置されていた不動明王像(高さ50cmぐらい)が盗難される事件があった。当時の様子を住職に伺うと、寺の人が離れて掃除している際に3名程度が参道をウロウロしており、そのうち1名はリュックサックを背負っていたグループがいたという。

お寺では30分～1時間ぐらい経った後に仏像の盗難に気づき、110番通報をしたが、未だに仏像は見つからず、現在は模刻したものを置いている。被害後には防犯カメラやSECOMも導入しているが、被害当時は防犯システムを導入していなかったそうである。

また、2009年か2010年ぐらいに本堂の西側にある建物の背面扉を破って賽銭を盗む事件もあったという。所有者は被害額は賽銭数数百円かもしれないが、建物の木扉を修理するのに45万円の見積額(実際は計上されない被害額)が出たため、美術工芸品の盗難だけでなく、賽



写真9 G寺の収蔵庫の内部¹⁰⁾



写真10 盗まれた不動明王像の模刻

銭被害に関連した文化財被害が大きな打撃であったと主張している。

さらに、住職の被害経験談から現状の文化財セキュリティシステムにおける課題についていくつか重要なことを述べられたので、ここに記しておく。セキュリティシステムが導入されている場合にも夜10時から朝5時までの間に事件が発生した場合にはセキュリティ会社の方から110番通報をするが、それ以外の時間帯に警報器が異常発報をすると、所有者が110番通報をしなければならないのが現状であるが、その際に事件現場の状況を何度も質問されたそうである。これは、危ないから事件現場には所有者が近寄らないようにという日頃の指導とは矛盾しているという主張であった。今までの教訓を生かして、お寺周辺の警察の警備を強化するよう訴えた結果、現在は昼間にも警察が巡回してくれるようになったという。

7. C寺(奈良県天理市所在)

C寺での盗難は、戦後は大きな事件が2回あった。

1回目は40年前に大師堂で不動明王像2体が盗まれたが、まだ戻ってきていないという。事件時刻が夜であったため、被害後に本堂と庫裏に防災施設を設置し、レーザー式センサーも設置したという。

2回目は、約12～3年前に地獄絵9幅のうち、最後の1幅の来迎図が盗難に遭ったという。この地獄絵は普段は公開しないが、毎年10月23日から11月30日までは虫干しを兼ねて本堂にて展示をしていたが、その展示期間中に開山時間から拝観時間開始までの間を狙って犯行が行われたようである。数名のグループによる犯行で、1名が見張り役をし、2～3回は下見をしていたという。住職の話によると、C寺は参道から入る受付経由の参拝もできるが、山からアクセスすることもできる立地であり、当時の犯行ルートは後者であったという。犯人は、3年前に逮捕されたが、奈良の至るところで賽銭を盗んでいたようで、賽銭泥棒として捕まえられた時にC寺の賽銭も盗んでいたことが判明したという¹¹⁾。盗品は、岐阜県のある古美術商が持っていたので、C寺で買い戻したという¹²⁾。

この被害を機に本堂内には防犯カメラを設置(写真11)するとともに、本堂の回りには柵を設置し、境内の受付の近くには赤外線センサーを設置したようである。また、本堂と庫裏には自動火災報知器(空气管)はずでに設置されていたが、数年後に奈良県内に寺社の放火が

次々と発生したため、炎感知器を本堂の12～3ヶ所に追加したという（写真11）。



写真11 C寺の本堂内外に設置されたセンサーとカメラ

また、C寺でも仏具の盗難被害にあったようで、五鈷杵はよく使うから盗難に気づきやすいけど、三鈷杵は普段使わないから盗まれても気が付くまでは時間がかかっていたという。

その他に、明治期には愛染明王像を盗まれ、その仏像が安置されていた仏堂も放火された事件もあったようである。愛染明王像は幸いに寺院に戻ったが、光背と台座は新造したものであるという。

8. 法隆寺

2013年11月27日付けの『読売新聞』に記事「法隆寺重文の塀2か所に落書き」（図2）が掲載されたため、筆者らは11月28日に現地調査に入った。被害は、西院伽藍の西側の大垣（版築）の路地側で発生しており、「殺すぞボケ」と「ヒマヤね」という落書きがあった。落書きの文言やその大きさよりも落書きの上部の土塀に貼られている「文化財を大切に落書きはやめ



図2 『読売新聞』、2013年11月27日付け夕刊（10面）

ましよう」という掲示板が文化財防災の啓発に役だっていないことを如実に見せられた事例として注目すべきであろう。今まで落書きは法隆寺と同様に文化財の前に注意書きを貼る方法を選択していたが、別の周知方法の開発も必要であると言える（写真12）。

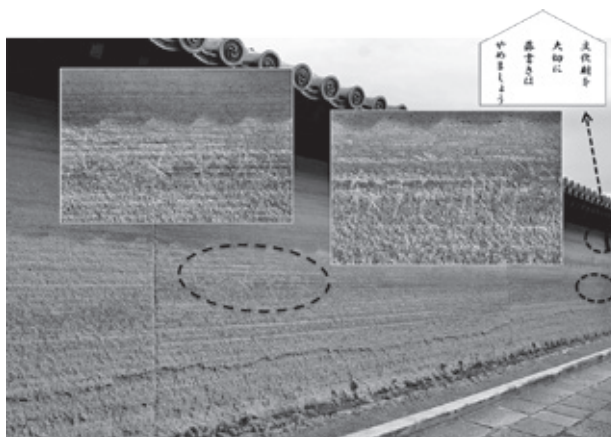


写真12 法隆寺の落書き被害（2013年11月28日撮影）

IV. おわりに

本稿では2013年4月から12月にかけて実施した放火や盗難、落書きなどの人災による文化財の被害内容をヒアリング及び現地調査を通じて把握した内容について報告した。

今までの盗難被害をみると、古文書よりは仏像や絵画が盗まれやすく、また高さ50cmぐらいまでの小型の仏像や石造仏、掛け軸（カメラなどが設置されている宝物館に展示されているモノよりは、お堂や収蔵庫の壁などに掛けられているモノ）などが狙われやすいことが明らかとなった。

犯罪傾向としては、グループで下見をしたり（1名は見張り役で、リュックサックを背負っていることが多い）、賽銭泥棒が美術工芸品まで盗む傾向があり、犯行時刻は夜中より拝観開始時間の前後や開門時間中が多い。また、文化財への侵入口としては塀を超えることはなく、受付や正面の入口を利用することが多いが、立地条件によっては山の道を利用した場合もある。

また、放火に関しては一カ所のみ狙われる場合もあったが、連続放火も多いため、文化財所有者は近所の被害ニュースを日頃から察知しておく必要があると言える。

なお、盗難や放火などの経験から従来の防火・防犯設備への見直しが行われ、設備の整備は進んでいるものの、

多くの文化財所有者が補助金の対象範囲や補助金の上・下限額の設定問題に頭を悩まされていた。特に、現在の文化財保護政策では指定文化財を中心とした対策しか整えられておらず、防火・防犯設備の導入とそのメンテナンス費用における所有者の経済的な負担も大きいという固執的な課題は未だに解決されていない。

今後の調査研究では、より多くの事例を蒐集することで、被害を事前に防ぐための具体的な対策づくりのための案を提案できるよう努力するつもりである。

謝辞

ヒアリング調査及び実地調査にご協力頂いた文化財(寺社)所有者の皆様に深甚の意を表します。また、本研究は立命館大学歴史都市防災研究所の拠点支援プログラムと住友電気工業(株)による受託研究「文化遺産を対象とした人為災害状況と防御システムに関する調査研究」の支援によるものである。

注

- 1) 文化庁のウェブページ (http://www.bunka.go.jp/bunkazai/bouka_bouhan/h250819_bousaibouka.html) を参考 (参照日: 2013年12月10日)。
- 2) アンケート調査の分析結果の詳細については、朴ジョンヨン・崔青林・金政淑・谷口仁士「文化財所有者を対象とした人災・獣害の現状と防御システムに関する調査研究」(『歴史都市防災論文集』Vol. 7、立命館大学歴史都市防災研究所、2013年7月、pp.161-168) を参考頂きたい。
- 3) 菅野朋子『韓国窃盗ビジネスを追い—狙われる日本の「国宝」』、新潮社、2012年
- 4) 中国・元時代(1271~1368年)の末期の作との言い伝えにより県指定文化財になったが、韓国文化財庁による調査では1323年に朝鮮半島で描かれた「観経十六観変相図」と判明し、韓国の図録などに紹介された。
- 5) 菅野朋子『韓国窃盗ビジネスを追い—狙われる日本の「国宝」』、新潮社、2012年、挿絵。
- 6) 3~8幅が盗難に遭い、1~2幅は展示中であった。
- 7) 以前の塔は白木に見えたが、県の教育委員会の判断で復原の塔には彩色を施したという。
- 8) 対馬市教育委員会文化財課『対馬市の文化財』、2010年3月
- 9) 詳細な経緯については石翔倶楽部が製作しているチラシ「仏頭をかえして」を参考。
- 10) 写真はウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%83%E8%88%88%E5%AF%BA>) を参考 (参照日: 2013年12月10日)。
- 11) C寺の住職のお話によると、犯人の指紋がC寺にも残っていたという。
- 12) 住職の証言によると、古美術商は8回転売を繰り返していて、文化財所有者は50万円(刑事裁判での鑑定額は500万円)で買い戻したが、実行犯は2万円で売っていたという。